心豊かな世代が育つ童話の里づくり(413)

―シリーズ― あなたの人権・わたしの人権

「まずは自分から」

くす星翔中学校2年
橋本　春妃

「ウザ」
「死ね」
と、誰かが言った。自分のことかもしれないし、他人のことかもしれない。そういうことを気にしながらも毎日学校に行っている人がいる。
「ウザ」この一言がケンカや差別につながることがある。実際、私も言われたことがある。この言葉を聞いて良い気分になる人はおそらく誰もいないだろう。
悪口は、人を簡単に傷つける。良い気分には決してならない。
小五の時のことだ。私は仲のいい友だちとキャンプに行く約束をして、一緒に申し込みをした。
そして、キャンプ当日友だちと合流した。その日は、バスでプールに行き、その後キャンプ場に行く予定になっていた。
友だちとは、バスも一緒に座ろうと約束していた。しかし、友だちは私とではなく他の友だちと座っていた。私は違う人の横に座ることにした。すると、横に座った人が
「あの子と座らんでよかったと?」
と、心配してくれた。
そして、プールに着くと、約束していた友だちが私にこう言った。
「あんた、いつも悪口しか言わんやろ、やけん一緒に座らんかった。ごめん。」
と。私は思い当たることがないので、他の友だちに聞いてみることにした。
「私、いっつも悪口言よる?」
「そんなことないよ。」
と、その人は答えてくれた。
しかし、私の気持ちはすっきりしなかった。その人が優しくてハッキリ言ってくれないのではないか、そう思えた。
キャンプ場で、私は約束していた友だちにこう言った。
「ごめんね。これから気をつける。」
と。すると、友だちも
「こっちも約束やぶったみたいになって、ごめんね。」
と、言ってくれた。
でも、悪いのはたぶん私だと、その時は感じていたと思う。
それまでの私は、「考えて話す」とか「相手の気持ちになって考える」ということができていなかったのだ。
このことをきっかけに、私は相手の気持ちを考えて話す力をつけることと、悪口を言わないということを心に決めた。
キャンプの後、約束していた友だちと二人きりで話す機会はあまりなかった。でも、何か月かたって、普通に話せるようにはなった。
小学校を卒業して、一年と半年が過ぎた。中学校では、いろいろな差別についての勉強をした。「部落差別」「人種差別」そして、差別問題を含んでいるだろう「戦争」。
小五のあの日から中二の今まで、私は差別心を全くもたなかったといったら嘘になる。
だが、中二になり、学校統合という自分を少しでも変えられるチャンスにめぐりあった。
自分では、悪口を言わないように気をつけているつもりだし、わけへだてなくいろいろな人と楽しく話すようにもしている。
もし差別されている人がいるのなら話を聞いてあげたいと思うし、嫌な言葉を簡単に言っている人がいたら止めたいと思う。
この学校から差別を完全になくすために、まずは私のクラスや学年からいじめや偏見をなくしたい。
小五の私は、たぶん悪口をたくさん言っていたと思う。このことを忘れずに、悪口を言わないように気を付けていきたい。
相手も私も嫌な気持ちにならないために。

この人権作文について、意見や感想、激励など、お寄せください。
また、みなさんの投稿もお待ちしています。
わたしたちをとりまく様々な不合理や差別性について気づいたことや感じたことを一、二〇〇字程度にまとめて、住所、氏名、連絡先電話番号を記入して(匿名も可)、玖珠町教育委員会社会教育課「あなたの人権・わたしの人権」までお届けください。